

「実践的」指導に関する一考察

～学習指導を中心に～

下 野 浩 二〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕

田 宮 弘 宣〔鹿児島大学教育学部附属教育実践総合センター〕

A Study of Practical Guidance for Students in College of Education : How to Teach Class Subjects for Primary and Middle Schools

SHIMONO Koji・TAMIYA Hironobu

キーワード：実践的教職科目群、体験と省察、観察と考察、指導のプロセス、「実践的」指導の展開

1 はじめに

本学では、平成19年度から平成21年度にかけ、特別教育研究経費事業「県教育委員会との連携による新しい教員養成カリキュラムの開発・実施」に取り組んでいる。社会の期待やニーズに応える教員養成を行うという使命を果たすことを意図したものである。

その目的の一つが、実践的指導力を備えた教員養成のためのカリキュラムづくりとその実践である。実践の中核を担う科目を総称して「実践的教職科目」群と呼び、これらの科目を適切に指導することで、教員として必要な資質能力の向上を真に図っていくことができると考えている。

本稿では、そこでの指導を「実践的」指導と考え、その指導のあり方はいかにあればよいかについて考察する。

これまでの指導の振り返りや学生の意識及び自己評価等に基づきながら考察を進めることにするが、現在、実践的教職科目群の一部の実践を経た段階であるため、主に「児童生徒への学習指導」に関する指導（平成20年度前期科目「教職実践研究Ⅰ」）を中心に考察していくことにする。

2 実践的教職科目群

前述したように、本取組の中核を担う科目が「実践的教職科目」群と呼ばれるものである。これら科目の学内での学びの位置づけについては図1のように考えている。

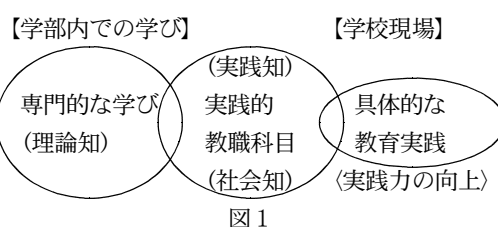


図1

このような立場から、「実践的教職科目」群を以下のようにとらえた。

教職に関する内容（教師の役割、職務、責任等）について、学校現場や社会教育の場等で直接的に体験することはもちろん、実践レベルの教材（DVDや様々な事例等）や模擬授業、模擬カウンセリングなど間接的な体験を通して、具体的に焦点化された視点から省察や考察を加えることで、教育実践に生きていく知識を身につけていくことのできる科目の総称

本科目群は、1年次から「ふれあう」、「関わる」、「やってみる」、「試してみる」、「掘り下げる」、「振り返る」、「広げる」という段階を順次経ながら、大学院までの学びを見通して設定されている。

取組の2年目を迎える本年度は、学部1年生を対象とした「教職基礎研究」と2年生を対象とした「教職実践研究Ⅰ（学習指導）」、「教職実践研究Ⅱ（学級経営、生徒指導）」の3つの実践的教職科目の実践を行うことにしている。また、類似した科目として共通教育教養科目の中で1年生前期から実践的資質の向上を目指した科目を1科目を県教委から派遣された教員4名で提供している。

3 学習指導に関する「実践的」指導

学習指導に関する「実践的」指導（以下実践的指導）について明らかにするためには、まず、「学習指導に関して、具体的にどのような資質能力の向上をめざしていくか」「その資質能力を育成するために、核となる指導はいかなる指導か」、そして「どのような指導のプロセスを経ていくか」等について明らかにする必要がある。以下はそのことについての考えである。

《育てたい資質能力》

児童・生徒に確かな力を育成する授業実践ができるようにするために、「学習指導に関する基礎的・基本的事項」（授業の構成要素である目標、内容、指導方法、指導形態、指導過程、教育機器等）や「それらを構築していく手順」さらに、その中核をなす「教材を分析し、解釈する力」を身につけ、自ら授業を設計し、実践することができるとともに、その実践を自ら診断し、次に生かすことのできる力

《核となる指導法》

ア 学校現場でのより多くの体験とその省察
イ 間接教材（授業DVD等）を用いた授業の観察と考察
ウ 学習指導の構想とその表現（指導案）
エ 構想に基づく授業実践と振り返り

《指導のプロセス》

本学で構想しているコンセプトに基づいて考えた指導のプロセスを示したものが以下の図2である。

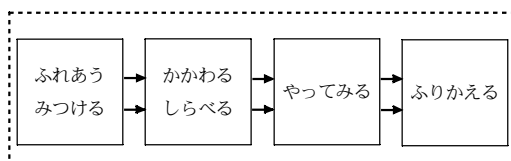


図2

以上のことを踏まえ、「実践的」指導を次のように捉えた。

学校現場での授業参観やDVD等視聴覚教材を用いた授業観察等を数多く行う中で、様々な形態の授業を具体的な視点から分析的に考察させたり、実際の授業と学習指導案を結びつけて考えさせたりすることを繰り返し行わせる。このような学びを通して、実際に指導案を構想し、それに基づいて模擬授業を行ったり、互いが参観した授業の授業研究を行ったりしながら、自らの力で授業設計を行い、それを表現することができるようにしていく指導

学ぶ主体である学生の側に立つと、実際の学習指導に触れながら自らが解決すべき課題を実感し、その課題を具体的な学習指導を観察することを通して解決し、その中で身につけた事項を基に実践・省察するというまさに「実践的」に学ぶ姿の具現化を目指した指導と考えている。

4 「実践的」指導例と学生の反応

具体的な「実践的」指導については、以下のよう
に2つの観点からその内容・方法を考えてみた。

【学校現場での直接体験】

- ・プロの授業を数多く参観する。
- ・実際の授業を参観しながら発問や板書を記録し、分析する。
- ・教師の働きかけや子どもの反応を記録し、分析する。
- ・実践に関する研究発表を聞く。
- ・授業研究会に参加し、現場教師がどのような視点で授業を見ているかを知る。
- ・自分の作成した指導案と同一単元のプロの授業を参観し、対比的考察を行う。

【学校現場の間接体験】

- ・生徒役として、模擬授業を見る。
- ・様々な視点を設定して、DVD等視聴覚教材で授業を見る。
- ・本時レベルの指導案を書く。
- ・発問案や板書計画を作成する。
- ・自分で書いた指導案に基づいて、模擬授業を行う。

- ・他の学生の模擬授業を観察する。
- ・互いの模擬授業について、グループで授業研究を行う。
- ・再度自分の模擬授業をビデオ録画等で視聴し、振り返る等

これら具体的な「実践的」指導に関する学生の意識について、調査の結果（表1）を基に考察してみたい。

調査1

調査日時：平成20年7月下旬

調査内容：実践的教職科目を受講して役になったと思う内容と方法をそれぞれ3項目ずつ書きなさい。（記述式 計6項目）

調査対象人数：「教職実践研究Ⅰ」

受講者 23名

表1 調査1の結果

内容	回答数
①附属学校での2回の授業参観	31
②模擬授業を行ったこと	25
③自分で指導案を作成したこと	19
④担当教員や他の学生の模擬授業参観	9
⑤教科に分かれての指導	8
⑥数多くの具体的な学習指導案の読み取り	6
⑦他の学生との意見交換や他の学生による評価	3
⑧発問案や板書計画の作成	3
⑨担当教員が行った「授業に役立つ指導法」を見れたこと	3
⑩授業の進め方（KR等）	2
⑪教材（資料）づくり	2

【考察】

学生の反応を見ると、①「プロの授業を参観したこと」②「模擬授業を行ったこと」③「自分で指導案を作成したこと」と回答した学生が2/3のものぼっている。

続いて多い反応は④「担当教員や他の学生の模擬授業参観」や⑤「教科に分かれての指導」⑥「数多くの具体的な指導案の読み取り」である。

さらに、⑦「他の学生との意見交換」をはじめとして、⑧「発問案や板書計画の作成」⑨「担当教員が行った「授業に役立つ指導法」を見れたこと」⑩「授業の進め方（KR等）」など大変具体的な授業の要素があげられている。これらを分析してみると以下のようなことをうかがうことができる。

○ 学校現場との位置関係

学生の回答として最も多かったものを順に3つ見ると、やはり、学校現場に直接足を踏み入れて、「実際の授業を見る」あるいは「学校現場を想定して指導案を書き」、それに基づいて「模擬的に授業を行う」ことが最も役に立ったと感じていることが分かる。「実践的」指導においては、できる限りこういう機会を増やすことが重要であると考ええる。

○ 具体的な指導案等

当然のことながら、はじめの段階では指導案に触れたことのない学生が大半である。⑥「数多くの具体的な学習指導案の読み取り」という回答に見られるように、一つの学習指導事例だけでなく、数多くの例に触れたいという気持ちがこの回答から伝わってくる。実際の授業参観であれ、間接的な視聴覚教材を扱う講義演習の中であれ、具体的な指導案を活用し、それと関連づけて指導していく必要を感じる。

また、現在はネット上にも数多くの指導案が掲載されている。予習課題等としても組み込みながらできるだけ多くの学習指導案や指導事例に触れさせることが指導上重要であると考ええる。

○ 具体的な指導法

実際の授業は、無数の要素で構成されている。これらどれ一つが不足しても、授業は成立しないことが多い。ここでは、学生はそのいくつかでは

あるが、その重要性に気付いていることがうかがえる。

例えば、発問や板書である。これらができていなければ授業は前に進まない。もちろん、いきなり発問を考える、板書を考えてと言ってもできることではない。指導にあたっては、プロの教師の板書を書き取らせたり、発問を追って記録させたりすることは不可欠である。併せて、子どもたちの反応にも着目させることが重要である。

どのような段階を経て初めて学生が的確な発問を構築できるようになるのか、効果的な板書を構造的に作成できるようになるのかは指導のあり方と大きく関わってくることである。

4 「実践的」指導の展開

学習指導に関する指導の初期の段階では、「本時レベルの指導案が作成でき、それに基づいて模擬授業を行えること」に目標を置くことになる。

ここでは、これまでの指導を振り返り、学生の意識を参考にしながら「実践的」指導について、学習のプロセスに沿って具体化を図ってみたい。

【ふれあう・みつける】

生徒役となって模擬授業を体験させる。

初期段階の目標を学生に実感的に捉えさせるためには、生徒役として模擬授業を体験させることがまず有効である。できれば、初めての体験であるので1単位時間全ての模擬授業を体験させたい。

模擬授業を体験したら、指導案を配付して、今受けた模擬授業と指導案を結びつける作業を行わせたい。そうすることで、学習指導案をはじめて見る学生にとっても実感をもって理解することも可能となる。

併せて、模擬授業における教師の学習活動の組み方や具体的な働きかけ、発問や板書に至るまで、自分なりに振り返らせ考察させることでその全体像や最終のゴールを実感をもって把握できると考える。



〔担当教員による模擬授業の様子〕

【かかわる・しらべる】

授業を数多く観察し、様々な視点から考察すること。

授業を数多く見せることは、実際の授業であれ、DVD等の視聴覚教材を用いた場合であれ、重要なことである。しかしながら、何の視点もなくただ多くを見せればよいというものではないし、それでは、力はつかない。以下にあげるような視点からの観察と考察を大事にした指導を行うことが重要である。はじめは、一回の観察で一つの視点から分析させたい。もちろん、焦点化された授業場面の観察でよい。観察の後には、そのことに対する考察とその意見交流、そして補足の説明が必要である。具体場面から入り次第に抽象化したり、観点としてまとめていくという作業が重要となる。

このような作業を繰り返す中で、次第にその視点を組み合わせて考察することも可能となると考える。以下、その視点のいくつかについて考えてみたい。

● 学習活動の組み方

学習指導案を詳しく分析したことがない学生にとって、学習目標を見据えながら学習活動を組んでいくことはかなり困難を極めることであることは容易に推測できる。学習の導入、展開、終末というプロセスの意味をDVD等の間接教材による授業観察によって理解させることがまずは必要である。その上でそのプロセスに沿いながら、どのような学習活動が展開されていくかをそれぞれの段階毎に考察させていきたい。次第に、学習活動

の内容やそのとらえ方、つながりなどにも意識を焦点化させていき、目標達成までの学習活動の組み方について考察させていく活動が重要である。

● 教師の働きかけ

ここでは、授業中、教師が児童生徒にどのような働きかけをしているかについて観察させたい。

教材や資料の提示の仕方、子どもをどのように学習に引き込んでいくか、学習内容や方法の説明の仕方、教師と子どもの問答、グループ活動のさせ方、うなずきや疑問等のKR情報の与え方、教育機器等の活用の仕方等教師として必要な技法を数多く学ぶことになる。

● 教師の発問と子どもたちの反応

教育実習中などでも、教師の発問に関しては学生が頭をいためることが多く見られる。学習活動と関連した筋道だった発問（主発問や補助発問）、意図が明確な発問、具体的な発問、心を揺さぶる発問、間のある発問等、発問の出し方やそのタイミングなどを観察させたい。

併せて、子どもの反応をどのように捉えたらよいか、誤った反応の取り上げ方、子どものつぶやきやささやきの聞き取り方、つまずきのとらえ方、その後の指名のあり方（意図的指名、相互指名、自由発言等）についても目を向けさせていきたい内容である。

● 板書の構造化

授業の進みに応じて、板書がどのように構造化され、分かりやすいものになっていくか、子どもの発達や書写能力に応じた分量、子どもの思考の跡が見える板書、筆順や仮名遣いに気をつけた板書、色チョークの活用等様々な視点から観察させていきたい。

教科に応じた、また、学年段階に応じた様々な板書法を記録させていくことを大切にしたい。

● 学習評価

授業中の評価については、まず、形成的な評価の進め方を観察させながら、どのような内容を、どのような方法で評価しているか、それが、次の学習段階でどのように生かされているか等観察させたい。

その上で、事前の評価（診断的評価）や指導後の評価等についても考察させていくことが大切で

ある。

このように考えていくと、より多くの授業を観察させることと同時に、一つの授業を何回か観察させるという手法も必要になってくる。DVD等の間接的教材の授業観察はこういう意味から考えると重要な教材である。



〔DVDによる授業観察と考察〕

研究公開の授業参観と授業研究会への参加

研究公開での授業は、ときには1年、2年研究を重ねた練り上げられた授業である。そういう意味でも学生にとっては、公開授業を参観する機会は大変重要な機会である。附属学校や代用附属学校はもちろん、他の公立学校の公開研究会も可能な限り参観させたい。学校現場で、研究の視点を持ち、練り上げられたよい授業を数多く観察させることは指導力を高めていく上で大変重要なことである。

併せて、授業研究会に参加させることで、現場の教師がどのような視点で授業を参観しているのかという自分にはない視点を補うためにも大切にしたい内容といえる。

【やってみる】



〔教科に関する単元研究〕

「かかわる」段階までに身につけた力をもとにして、実際に自分でどこまで指導を構想できるか試してみる段階である。

ここでは、教材の解釈の仕方や教科教育の本質に迫るためにも、各学科の教員の協力が不可欠となる。教材に対する確たる解釈なくしてはよりよい授業は生まれないのであり、そのことに気付くのがこの段階である。

自分の作成した指導原案との対比・考察（学校現場での授業参観）

各学科教員の指導に基づいて作成した指導原案をもち、同一の単元の現場教員の授業を観察することは、自分の指導案に何が足りないのか、どこをどう改善する必要があるのかを学生自身に考察させるために大変重要な振り返りの場となる。

この授業参観が、授業に対する新しい見方をより確かなものとするきっかけになることを期待している。



〔指導案との対比を目的とした授業参観〕

練り直した指導案を基に、他の学生を相手に模擬授業を行う。

練り上げた指導案を基に、教材の作成や発問案、板書計画を基に授業を行うことになる。10分から15分程度の時間であるが、学生にとっては、教師という立場ではじめて授業を行う経験となる。今後、数多く行う模擬授業や実際の子どもを

相手にした授業のスタートとなる活動である。

生徒役となる学生にとっても、子どもはこのように反応するのではないかという違う立場からの考察を可能にするとともに、自分では見出せなかった指導法や教具の工夫等を見るよい機会でもある。

ここでは、互いの批評等も組み入れながら自己評価、他者評価を取り入れた活動にしていけることが重要である。

【ふりかえる】

模擬授業を基に授業研究を行う。

学生が行う模擬授業については、授業後互いに評価しあったり、また、ビデオ等に録画された自分の授業を再度振り返る場を設けたりすることが重要である。学生同士の相互評価はもちろん、自分の目で自分の授業をきちんと分析させることが重要となる。

併せて、その分析に基づいて、教員による意味づけをきちんと行っていくことも大切になりたい。学生にとっては、このことが次への課題の生み出しにつながっていくことになる。

5 「実践的」指導の成果と今後の課題

ここでは、「実践的」指導を受けた後の学生の感想（表2）と学生自身のこれからの課題（表3）、さらに、学生による自己評価の上昇率（表4）を基にしながら、「実践的」指導の成果と今後の課題について考えてみたい。

表2は、授業終了時に学生に実施した調査2の結果である。

調査2

調査日時：平成20年7月下旬

調査内容：本授業全体を通しての感想があれば書きなさい。

調査人数：「教職実践研究Ⅰ」

受講者 23名

表2 調査2の結果より抜粋

学 生 の 主 な 反 応
○目標やモチベーションに関すること
<ul style="list-style-type: none"> ・教師の仕事が具体化され、あこがれでなく、確かな目標となった。 ・何よりよかったと思うことは自分のモチベーションが高まった。 ・早く参加観察実習に行きたいという気持ちがどんどん高まった。 ・非常に大きな経験になった。今後にきっと生きると思う。
○やりがいに関すること
<ul style="list-style-type: none"> ・先生になるということが少し分かった。 ・人生初めての授業の経験ができた。大変であったが、楽しさとやりがいを感じた ・すごく難しい授業だったが、指導案の作成方法や模擬授業など他の授業では体験できなかったことができた。 ・この講義を受け、自分が教師として少しでも成長できたと思う。
○周りとの関わりに関すること
<ul style="list-style-type: none"> ・モチベーションの高い人がたくさんいていい刺激になった。 ・先生方の熱意が伝わってきた。 ・たくさんの先生方のお話をきくことができた。
○課題発見に関すること
<ul style="list-style-type: none"> ・もっと学ばなければならない課題をたくさん見つけた。この授業をもとにしてよりよい知識を身につけていきたいと思う。 ・模擬授業ははじめはいやだなあと思っていたが、本当にやってよかった。課題がたくさん見えました。 ・今の自分に足りないところを多く知ることができた。これからの大学生活で自分に足りないところを満たしていきたい。

上記の最後の項「課題発見」に関して、今後の自分の課題は何ですかという問いに対する学生の回答をまとめたものが表3である。

表3 学生から出された課題

学 生 か ら 出 さ れ た 課 題
●授業設計に関すること
<ul style="list-style-type: none"> ・目標とめあての関連 ・目標を定めて授業計画を立てること ・クラス全体で動きのある授業 ・教科書研究 ・もっと多くの指導案を読むこと ・生徒中心の授業の作り方 ・自分の納得のいく教材作り ・生徒の現状に立つこと（既知、未知） ・授業展開をもっと細かく考えられるようになること ・評価基準、基準の設定
●自分自身の資質に関すること
<ul style="list-style-type: none"> ・もっと自信をもってできたとと言えるようになること ・物事を順序立てて考えられるようになりたい。 ・自分の核になるものを見つける。
●指導技術等に関すること
<ul style="list-style-type: none"> ・子ども目線での話し方、発問の仕方 ・めあての提示するタイミング ・発問の工夫、補助発問 ・声の大きさ ・言葉の使い方 ・予想しない反応への対処の仕方 ・文字の書き順 ・子どもの反応を見ながら授業を進めること ・人前で堂々と話すこと ・子どもが見やすい板書 ・うなずきかた ・立ち位置 ・パソコンの使いこなし方 ・板書をあわてず、きちんと書く。

《成果》

表2の結果を見ると分かるように、学生がこれからの学びに対する目標を明確にもてるようになったり、モチベーションを高めたりしている姿を見ることができる。

また、大変だった反面、やりがいや楽しさを感じ

じながら学んでいる様子や周りからの刺激を受けたことの喜びを感じている姿を見ることもできる。

さらに、これからの課題を数多く見つけられたという姿も多く見られる。実際、表3の反応を見てみても、「授業設計に関して」「指導技術に関し

て」そして「自分自身のあり方に関して」等大変具体的な課題が数多く出されている。

授業前の様子から考えると、このように課題を明確にできたことこそが最も大きな成果といえることができるのかもしれないと感じるほどの反応といえる。

《今後の課題》

表4 学生の自己評価の伸び率

① 学習指導の基本的な事項	上昇ポイント
ア 学習指導要領や年間指導計画などで、単元の目標や指導内容などを確認することができますか。	1. 3 5
イ 教科書や資料などを分析して教育的価値を明らかにし、指導すべき基礎的・基本的な内容を明確におさえることができますか。	1. 0 9
ウ 目標を達成した具体的な子どもの姿を「評価基準」として設定し、計画的に評価することができますか。	0. 7 0
エ 子どもの実態や意識について把握し、指導方法や教材教具の工夫に活かすことができますか。	1. 1 3
オ 導入・展開・終末の基本的な指導過程にそって、一単位時間の学習指導案を作成することができますか。	1. 6 5
カ 教科書を用いて分かりやすく学習を組み立てると共に、子どもからの質問に的確に答えることができますか。	0. 9 6
② 板書、話し方、表情などの基本的な表現力	上昇ポイント
ア 学習の流れにそって、子どもの反応を受け止めながら内容を構造化したり、丁寧に板書したりすることができますか。	0. 7 4
イ 学習のねらいにそって、興味・関心を高めたり思考を深めたりするような発問を工夫することができますか。	0. 7 5
ウ 話し方や表情を工夫したり、子どもの反応に対してうなずきやほほえみ、相槌を与えたりすることができますか。	0. 3 5
③ 学習の状況に応じた指導の工夫	上昇ポイント
ア 定着の状況に応じて、学習形態を修正したり、個に応じた指導などきめ細かな指導を工夫したりすることができますか。	0. 5 7
イ 基礎的・基本的な内容について反復指導したり、具体物の提示や実験などを工夫したりして、定着を図る工夫をすることができますか。	0. 6 5
ウ 視聴覚機器や教育機器を積極的に活用して興味・関心を高め、指導の効果を高めることができますか。	0. 4 8
エ 子どもの障害の程度や特性などに配慮して教材・教具を工夫したり、個に応じた指導を工夫したりすることができますか。	0. 3 9
オ 学習中や学習前後の子どもたちの変容を評価し、補充指導や授業の改善に役立てることができますか。	0. 5 7

表4は、学生自身による授業開始時と授業終了時の自己評価の変化を4段階評定でどの程度伸びたかを平均してみたものである。

これを見ると分かるように、①の「学習指導の基本的な事項」に関しては高い伸びを感じているものの、②「基本的な表現力」や③「学習状況に応じた指導の工夫」に関しては十分な伸びを感じていないことがうかがえる。学生の学年や学習の位置から考えるとやむを得ない面もあるが、今後、「実践的」指導を「どのような流れ」で、「どのように組み合わせ」ながら授業を構成していくことがより望ましいのかという面などからも授業改善を図っていく必要がある。

6 おわりに

ここで得られた成果を他の「生徒指導」や「教師の使命や役割」等の指導の中でどのように生かしていくかについても今後考察していきたいと考えている。

引用・参考文献

- 中央教育審議会答申 「今後の教員養成・免許制度の在り方について」 2006. 7
 鹿兒島大学教育学部 特別教育研究経費事業平成19年度中間報告書 2008. 3